


## 博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 佐藤 仁彦 

サキヤ氏の学位（課程博士）請求論文「Nepal and China ——International Relations and Trans-Himalayan Trade in the 18<sup>th</sup> Century」は、ネパールとチベットは何が原因で1788年と1791年の二度にわたって戦争することになったのか、その戦争原因を再定義することを旨とした英文論文である。

まずはその構成を示す。

Maps

Introduction

Chapter1. Political change in Pre-unified Nepal and its Effect on Tibet

Chapter2. Participation of the British East India Company in the Tibetan-Indian Trade and its Impact on New Nepal

Chapter3. The significance of the trade between Tibet and India in Pre-Unified Nepal

Chapter4. Factors Contributed to the War in 1788

Chapter5. Nepal's First War with Tibet in 1788

Chapter6. The Second War between Nepal and Tibet in 1791 and the Military Expedition of Qing Empire

Conclusion

Aftermath

Appendix I

Appendix II Photos of the Silver coins minted for the Tibetans during the ruling period of King Prate Singh Shah

Appendix III Photos of Nepalese rulers in 18<sup>th</sup> century

Bibliography (p218+25)

論文の要旨は以下のようなものである。

近世ネパールは、18世紀後半にゴルカ（英語表現ではグルカ）王朝による軍事的制圧によって築かれた。この統一ネパールは、それ以前の「ネパール」の版図を大きく拡大し、多くの土侯国がその中に組み入れられ、内部構造においても、対外関係においても以前と大きく異なった。膨張したゴルカネパールは、周辺勢力のチベット・清朝、イギリス植民地軍と相次いで戦うことになるが、これらを通じてネパールの版図が画され、対外政策の方向が定められていった。本論文は、従来、イギリス・ネパール戦争に比べると、漢文資

料を取り扱う困難さから、取り扱われることが少なかった「ネパール・チベット戦争」を正面から取り扱ったものである。

従来、この戦争の原因として主張されてきた学説は、カトマンズのジャヤプロカシュ・マッラ王とバクタプールのランジット・マッラ王が、新興の軍事勢力ゴルカと戦うために純度の低い貨幣を鑄造して利益を上げ、またそれをチベットにも大量に輸出して軍費に当てたため、貨幣交換比率をめぐって発生したチベットとの紛糾問題が原因である、というものであった。サキヤ氏は、序論で、この問題に焦点を当てて、清朝側資料・イギリス側資料を用いて検討を加え、マッラ王の低品位貨幣の鑄造を確認しつつも、マッラ王朝崩壊後もチベットでのネパール貨幣の流通が見られ、チベットでのその流通量が、ゴルカの征服戦争のために減少したため、チベット自身が貨幣を鑄造しなければならなかったという歴史的事実から、純度の低い貨幣がチベットで流通したという事実はなく、通説は成立し得ない、と否定する。然らば、真の原因は何か、と問い、サキヤ氏は、ゴルカのネパール統一の軍事行動が原因ではないかとして、次の第一章において、ゴルカ王プリトヴィ・ナランヤン・シャハの軍事行動に沿って議論を進める。

ゴルカ勢力はカトマンズ盆地西方から勃興し、盆地を制圧、トランス・ヒマラヤ貿易ルートを通断して外国人商人を追放した。この結果、この長距離貿易に利害関係・関心を持っていたチベット・イギリス（東インド会社）との関係が悪化した。また、ネパール東西の諸土侯国を併合するにつれて、ゴルカはその土侯国の従来の領土を自国＝統一新ネパールの領土としての権利を主張し、シッキムとチベットにおける領土権を主張した。このように、軍事的統一の進行とともに周辺勢力との間に領土問題を含む摩擦を生じさせ、脅威すら感じさせた。この延長線上に、イギリスのトランス・ヒマラヤ貿易ルートへの参入が生じた。サキヤ氏は、第二章で、イギリスがブータンとコーチ・ビハール間の戦争に介入したが、これが、イギリスとチベットとの関係（通商関係）成立のきっかけになったことを述べる。チベット貿易の独占を目指した新ネパールは、このチベットとイギリスとの関係締結を好まず、イギリスをめぐって、チベットとの関係は悪化した。この関係悪化が間接的に戦争原因になった、という。

氏は、ここでネパールが独占を望んだトランス・ヒマラヤ貿易の構造とその重要性についてかなり詳細に言及し、それが、どのように統一ネパールと関係しているかに議論を進める。これは不可欠な考察であるといつてよい。ゴルカの統一ネパールがトランス・ヒマラヤ貿易に制限を加えたことは前述したが、そのため、チベットはネパールルートに代わるルートをシッキムやブータンに開拓しようとした。それによって一時、両国間関係はこじれたが、1775年に両国は貿易ルートを開通させることに同意し条約を締結した。チベットは、このトランス・ヒマラヤ貿易に大きく依存しており、ネパール経由で貿易を開通させたいという意向があったからである。しかし、ネパールは国王の死去に伴う国内政治権力闘争のためにこの条約を遵守することができなくなり、チベットは再び新ルートを探

すことになったのである。氏は、従来の学者はこうしたチベット側の事情を考慮せず、もっぱらネパール側からのみ見て、貨幣問題が戦争原因だとしている、と批判する。

戦争につながった大きな要因は以上であるが、サキヤ氏は、第四章で、その他の付随的な諸要因について整理して論じる。第一は、ネパール統一によって生じた政治外交関係の変化である。統一前の諸土侯国はチベットとそれぞれ外交関係を持っていたが、ゴルカによる併合はこれを失わせ、チベットの新ネパールに対する不信と反発を生んだ、という。この点の指摘は注目される。第二に、ゴルカは、統一ネパールをヒンドゥー化（国教化）したことである、という。それによって、仏教国チベットのネパールへの不信が増大したのだ。第三は、チベットが、ゴルカの軍事行動にブレーキをかけるためにチベット産の岩塩のネパールへの輸出を禁じたことである。これは、ネパールの支配者を刺激した。第四は、この摩擦を解消するために、ネパール側は、ラサにいた清朝の駐藏大臣に接触し、これを介して交渉し、何とか事態を打開したいと考えたが、チベット人大臣の妨害でこの交渉ルートは通じず、成功しなかった。これは、チベットにおける清朝のプレゼンスが大きくないという印象をネパール側に抱かせた。このネパール側の判断は対チベット戦争の発動を容易にした。第五は、ネパールが、チベットの赤帽派ホトクトのシャマルパ・ラマの亡命を受け入れたことである。ネパールの摂政バハドゥール・シャハは同じような亡命経験を持っていて、これをチベットに対し影響を及ぼすよい機会であるとして彼を積極的に引き受けた。そのため両国間の関係は悪化した。

こうして両国は戦争へと突入するのだが、氏は、第五章で、ネパール軍のチベットへの侵略状況を中心に第一次戦争の展開を述べる。それと同時に、中国側資料を使用して、乾隆帝はこの戦争に遠征軍を派遣して、ネパール軍に一撃を与えて懲らしめ、それを降伏させ、支配者たちを清軍軍営に來させて謝罪させよ、しかし、清軍はネパール領内へ侵入はさせず、チベットと領土問題のある国境を画定し、二度とチベット領内への侵入をしないとの確約をさせよ、という基本方針を現地司令官に伝えていたことを明らかにしている。しかし、現地司令官はこれを真剣に受け止めず、さらには、ネパール軍との衝突を避け、最後のネパール・チベット間の講和交渉にも参与しなかった。かれらは、チベットに賠償金支払いを課すようなネパール側主張の講和条約をチベットに受け入れさせた。加えて、彼らは、二度とチベットに対して手を出さないようにとネパールに対して釘を刺すこともしなかった。このように、清朝遠征軍の戦争処理はいい加減であったといわざるを得ないものだった。この取り繕ったような問題の多い戦争処理が1791年の二度目の戦争の原因になった、と主張する。

第六章は、1791年の戦争を清朝側資料を中心にして論述する。この戦争は、第一次戦争後、ネパール側がチベットに対して不満をもったことが原因で発生した。1788年戦争の講和条約で決められた賠償金の支払いをダライ・ラマ8世は二年にわたって履行しなかった。それに不満を持ったネパール側は、サキヤ寺院を攻撃、タシルンボ僧院を掠奪するという軍事行動に出、やがて国境線に退いた。これを知った北京の清朝中央（乾隆帝）は中国各

地から満洲軍を動員、福康安を司令官に遠征軍を組織、ヒマラヤを越えてネパールに入らせた。しかし、山岳地理を利用したゲリラ的抵抗のために清軍はカトマンズ近くで敗北し、講和に入った。この講和成立にはチベットは姿を見せず、清軍司令官がネパールと、ネパールが清朝の朝貢国になる等の外交的決着をつけた。

結論で、筆者は、「国家形成」に焦点を当ててゴルカ王の軍事行動・政策を改めて捉える。かれらは、軍事行動によってもたらされた統一ネパールを維持するために、チベット・インドに対して新たな幾つかの外交政策をとり、トランス・ヒマラヤ貿易への対応政策をおこなったが、と同時に、国内の諸土侯国下の住民たちをヒンドゥ教という精神的絆でまとめていった。また、国家統一を象徴する新たな銀貨幣の導入を決め、常備軍を設立した。これらの国家形成に伴う諸変化は以前のネパールの秩序と異なるものだった。チベットはこの新秩序に理解を示そうとしなかった。これらの諸変化の全体が起因となったがゆえに、ネパールはチベットとの戦争を避けることが出来なかったのだ、と結論付けた。しかし、皮肉なことに、この戦争によってネパールは朝貢国として清朝と外交関係を結ぶことによって、チャイナカードを手にする事になり、強大なインドの勢力との間とのバランス外交の手段とすることが出来た。その意味で、小国ネパールの独立の今日的姿の起源となったのである、と指摘している

## 評価

本論文は、従来からの貨幣原因説が、第一次資料の根拠を明確にしないまま流通させられてきた状況に対して、漢文史料、英国のチベット市場調査使節団の調査報告などを用いて、それを実証的に否定して覆し、主原因をネパールの領土拡張そのものに求める見解を打ち出している。その際、先行研究を丹念にフォローしながら、戦争原因を作った当時の国内外の状況を各章ごとに、時系列的に、説得的に議論を展開し、うまく結論へと導いており、その結論は、妥当なもので肯定しうる。新たな成果を達成したものと認められる。論述の構成および内容もしっかりしており、全体として、手堅くまとめられたなかなかの「力作」「労作」で、「貴重」である、と多くの審査委員から評価を受けた。その独創性、斬新性に対して高い評価が与えられるとの意見も表明された。とくに、ネパール語文献はもとより、英語、フランス語、日本語、中国語、古典漢文の諸文献を駆使し、史料的制約の中で、史料に忠実誠実に、18世紀ネパールの諸状況を克明に描き出し、総合しようと苦心している姿勢は評価される。この点は、内陸アジア研究が多言語資料を駆使してはじめて達成されるという基本状況にあるとはいえ、これだけ幅のある資料（特にネパール語と漢語史料）を持ってこの地域・時代を扱った研究者はほとんど前例を見ず、また、この地域・時代を取り扱うには、上記諸言語の諸資料のいずれを欠いても十分になされ得ないなかで、サキヤ氏はそれに正面から立ち向かい、困難を克服して成果を挙げたと言ってよい。稀有の幅を持った研究者であると大いに評価される。

しかし、論文に問題がないわけではない。審査委員から出された問題点は、おおよそ以

下の三点であった。第一は、論述がやや叙述的で、議論が拡散的になる傾向があり、もう少し絞り込んだシャープな切り込みと、分析的で工夫された呈示が望まれる部分がある。例えば、貨幣問題原因説を退け、ゴルカの軍事行動による国家統一という全体状況に原因を求めることになれば、18世紀ネパールをめぐる大きな世界史的構造がどのようなもので、統一以前の「ネパール」国内の状況がいかなる特質を持ったもので、ゴルカが何を動機として軍事行動に出たのか、これらを簡潔に把握し叙述した後に、国家形成などの議論を展開すると、より議論が鮮明になったのではないか、あるいは、貨幣問題原因説を退けても、両国間に経済・交易問題は存在したわけで、この両者を論理的にどう接合させてクリアに説明するか、工夫が必要ではないか、というものである。

第二には、資料の問題がある。本論文の主題に関わる史資料がイギリス *India Office Library* に存在していても拘らず、それに言及しておらず、また、チベット・インド辺境に赴いた宣教師の記録も、*Desideri* のみが利用されているに過ぎない点、漢文史料も档案史料が北京・台北に存在していること、これらがきちっと言及されていない点は、不十分ではないか、国外のそれらの第一次史料を十分に活用するには多くの困難があるが、それらの存在と活用について、史料学的に言及が必要であろう、というものであった。また、漢文史料に大きく依存しその読解と英訳に大きな労力を傾注しているが、ネパール語史料のローマ字化とその深い読解にも応分の努力が払われるべきではなかったか、というものである。

第三は、使用「概念」の問題である。ゴルカによる「国家形成」を *nation building* と英文表記している点は不注意である。また、それを「ヒンドゥ化」*Hinduization* として説明しているが、この概念使用がいささかあいまいで、国家のヒンドゥ化（国家行政機構・官職や国家祭祀・イデオロギーのそれ）と、社会統合としての精神的絆の強化の側面、との関係がクリアでない。これは、史料読解問題とも絡んでおり、今後、研究を深化させるには注意が必要であろう、というものであった。

最終試験においてサキャ氏は、審査委員からの諸質問およびこれらの批判に対し、十分に的確に答えるとともに、論文は論点を戦争原因の解明・説明に絞り込んで論述したので、全体的歴史叙述の構造が見え難くなったという指摘は考慮しなければならない、史料については、その存在の指摘の点は承知しているが、留学生としての諸困難性から今後の課題としていること、史料読解・概念使用については今後さらに注意をして研究を進めたい、と答えた。

審査委員から寄せられたこれらの批判と指摘は、本論文全体の評価を大きく変えるものではなく、今後続く氏の研究への期待からの積極的注文であった。史料言語の壁を乗り越えようとする本論文のような試みは、今後の南アジア研究にとって最も求められているものであり、それを遂行して、チベット・ネパール戦争の原因究明に新たな見解を提示しえた点は、研究史上大きな寄与と言ってよく、審査委員全員一致で、本論文は博士学位授与に十分な内容を有するものであると判断された。